古代史からみた鞠智城

佐藤　信

はじめに

私は、「古代史からみた鞠智城跡」という大きなテーマで、主には東アジアの七世紀後半の動乱の時代、日本における古代の律令国家の形成の歩みの中で、鞠智城というものをどのように位置付けたらいいか、というような筋でお話しをしたいというふうに思っております。

一　白村江の敗戦と律令国家の形成

まず、白村江の敗戦からお話しを始めようと思います。これについては、もうすでに皆様も御承知でしょうし、今日笹山先生のお話しもありましたので、あまり繰り返す必要はないと思いますが、まあこれが古代の、いわば当時における世界戦争だったということですね。ちょうど唐の大帝国と新羅が結びまして、

図1　発表中の佐藤信氏

六六〇年に百済を滅ぼし、六六八年に高句麗を滅ぼしました。この大きな動乱の過程の間で、百済復興軍と倭の軍勢が結んで、唐と新羅に戦いを挑むわけですが、六六三年、白村江で大敗北を喫しました。これが白村江の戦いです。

六六〇年の百済の滅亡に際して、当時の倭の政権は、斉明天皇の時代でありますけれども、『日本書紀』によりますと、大王である斉明天皇自身と、皇太子というふうに書かれています中大兄皇子だけでなく、大海女皇子ですとか、中臣鎌足内親とかが、そろって九州の地まで行きます。最初は博多湾沿い、後に朝倉宮というところに、筑後川沿いですね、宮を築いて、そこを拠点にして、朝鮮半島における戦争を指導するということを行っております。通常、律令制の下では、天皇と皇太子、天皇さんと皇太子さんがいっしょに都を空けるということは絶対に無いんですね。天皇が行幸する時には、皇太子が都に残って皇太子ゲンコクという体制を取るということが決まっておりました。律令制以前のこの時代に、大王である斉明天皇と皇太子相当である中大兄皇子が、そろって九州、北九州の地に出張っているということで、異例中の異例だったのではないでしょうか。しかも行く途中で、吉備や伊予、瀬戸内や四国などで軍勢動員をしながら北九州まで進んでいるという様子が『日本書紀』や『万葉集』を見れば、出てくるわけであります。白村江の敗戦の時に捕虜になって、唐で拘束されたり、捕虜として拘束されたりしたような人たちが、段々と何年ぶりか、何十年ぶりかに日本に帰ってきたという記事が『日本書紀』や『続日本紀』にございます。これを見ますと、この戦いに参加した軍勢の様子が分かるわけでありますけれども、大体国造軍、国造（くにのみやつこ）の軍勢というふうに私たちは呼んでおります、地方豪族の軍勢の集合体が倭軍として構成されて、白村江に向かい、

白村江の戦いに参加していくというふうに考えております。

その捕虜として苦労した末に、酷い場合は四十年ぐらいぶりに日本に帰ってくる人の記事があるわけですけれども、それらを見ますと、九州地方だけでなくて、日本列島の各地、かなり広範囲な地方豪族がこの戦いには参加していることがわかります。まあ遠い方では、陸奥国の人まで加わっていたようです。その中には当然九州の人もおりまして、筑後の地方豪族ですとか、それから肥後の場合もあります。十八ページの一番上に、「肥後国の皮石郡のひと壬生諸石」という人の記事がありますが、この人は三十三年ぶりに日本に帰ってきたということで、まあ苦労したということで、褒められています。私は、こういった広範囲の地方豪族がこの戦いに参戦したことによって、日本古代の律令国家の形成というものが格段と、その戦後に進んだのではないかというふうに思っております。

二　白村江の敗戦後の防衛対策

そこで、その敗戦後の防衛対策について話しを移したいと思います。『日本書紀』の六六四年の条を見ますと、対馬、壱岐、筑紫国などに防人と烽を置いたという記事があります。また、その翌年には、百済の亡命将軍、亡命貴族である達率という高い位を持つ「答本春初」が長門国の城を築き、達率の「憶礼福留」と達率の「四比福夫」という百済貴族が筑紫の国に遣わされて大野城と基肄城の二つの城を築いたという記事がございます。この記事の中で、派遣して「築かしむ」主体というのはやっぱり、当時の中央政府とみていいと、私は思います。これは当然のことでありますけれども、防人を置いたのもそういうものであると思います。

ただし、この時に鞠智城の記事が無くて、鞠智城が最初にみえる記事は『続日本紀』の文武天皇の二年、六九八年でありまして、これには鞠智城の修理のことが書いてあります。中身は、「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕ろわしむ」と、修理させるということであります。ここでは、中央政府が直接というかたちではなくて、大宰府にその三つの城の修理をさせているというのに一つ気を付ける必要があるかと思います。大野城や基肄城を築城した六六五年から数えて、三十三年年後のことでありまして、三十三年経って大野城や基肄城がようやく修理しなくちゃいけないということで、修理が行われたわけです。おそらくこの鞠智城もですね、大野城、基肄城といっしょに、名前は出てきてもおりませんが、修理が必要になった段階になっていたということを考え合わせて、鞠智城も大野城、基肄城とほぼ同じような時期に、七世紀後半に築かれたとみていいのではないかという根拠に、資料的な根拠になっているというのが一つございます。

その翌年にも、大宰府をして三野城と稲積城という二つの城が修理させているという記事があります。これらの比定地は挙がらないんですけれども、一応これまでの研究で推定されているのでは、三野城については筑前の那珂郡の美野駅家の辺り、稲積城については筑前国の志麻郡、糸島半島の日本海に面した志摩町、今でいうと前原市の稲留という地名の辺り（青木和夫先生がそこに「火山」という山があるので、その辺りではないかということを言われております。）です。後でお話しするように、この志摩の地、嶋郡の郡司（この地域の地方行政区画、郡のトップ）は、これは大領といいますけれども、は肥君猪手であることが、七〇二年の戸籍に記されています。肥君というのは肥前国、肥後国の肥であり、熊本の地方豪族の出身者が嶋郡の郡司の大領として七〇二年の戸籍に名前が挙がってい

るわけです。百二十四人の戸籍でありまして、奴婢を三十七人も持っているという有力者であったことが分かります。この方は、正八位上の位階を持つ郡司でありました。熊本の地方豪族出身といいましょうか、その一族の人が、七〇二年の戸籍で郡司ということは、仮に六九九年の稲積城が志麻の城でありましたら、その修理にも関係する場合があるかなと思います。まあ、そういう形でちょっと縁のある城がもう一つ、あまり今は確認されてない城として、出てくるということがあります。

またこの時には、六六四年に防人と烽が置かれたということがありました。お城を築くだけでなくて、そのお城を築いても、敵がどちらの方からどうやって来るのかということは、常に摂行してなくちゃいけないわけですよね。それを確認するために六六四年に対馬、壱岐、筑紫国に烽が置かれたということでありました。この烽というのが笹山先生のお話しにあったように、昼間だと煙を、烽を上げて、夜だったら火を灯して、隣の烽まで飛ばすという、十数キロメートル離れた隣の烽までやって、それは最終的には九州であれば大宰府まで情報が行かなくてはいけないということになると思います。これはもうネットワークですね。『肥前国風土記』や『豊後国風土記』には、各郡に置かれた烽のことが記載してありまして、肥前の松浦郡なんかは一郡内に八箇所もあるということが記されています。また、豊後国にもあるということは、この烽のネットワークが必ずしも博多湾の北部、北九州の北部海岸だけでなくて、私は西側に入った海岸、あるいは東側に入った海岸も組まれているということを示していると思っております。これは、律令制の下では、大宝律令によって八世紀に確立する律令制の下では、軍防令の中に規定がありまして、これは烽は軍事施設なんですね。で、中央でいえば、兵部省の管轄です。大宰府の範囲では、大宰帥という大宰府の長官の職掌に烽があります。諸

国、肥後国でいえば肥後国司に烽や摂行が職掌として掲げられています。

七四〇年の藤原広嗣の乱の際には、藤原広嗣が筑前国の遠賀郡の郡家、郡役所に軍営を張りまして、そこから烽を掲げて国内の兵を徴発したという記事が『続日本紀』に書かれております。九州の場合、烽を上げて軍団の兵士を徴発するということは、外敵が攻めてきたということを基本的には意味すると私は思いますので、この烽があったら諸国では国司が軍団を徴発して、すぐに対応しなくては危険であるというような態勢になろうとかと推測しております。

広嗣の戦いの時には、広嗣軍は三つの道から、今で言う、今の北九州市ですよね、あの山口県に近いところに進軍していくわけです。広嗣自身は、大隅、薩摩、筑前、豊後の軍勢、計五千人を率いて、鞍手道から進んだということであります。それに対して、広嗣の弟の綱手は、筑後と肥前の軍勢五千人を率いて、東側の豊後国から今の北九州市の方を目指すと、あの門司の方を、関門海峡の方を目指すということであります。三軍のもうひとつの軍は、多胡古麻呂という豪族に率いさせるわけですが、これは田河道、今の、福岡県に田川市ってありますけれども、その田河道から進軍しなさいということなんですが、残念ながら率いる軍の数が『続日本紀』に漏れております。先ほど言った大隅、薩摩からも軍勢を率いているんだから、肥後があってもいいんですけれども、筑前、筑後、肥前、豊後があって、肥後も豊前も無いわけであります。ただ残る軍勢の中に肥後国の軍団の兵士が勘定されているとすれば、先ほどちょっと笹山先生のところでお話しのあったように、九世紀の初めまでは四千人、四軍団、四千人の軍勢を肥後国は持っとりましたので、それが動員されたということになるかもしれないということがあります。九世紀の史料の中に、鞠智城には兵倉（つわものぐら、へいこ）、武器

を収めている兵倉がずっと維持されていたことが記されています。そういう際には、鞠智城にあった、当然置かれていた武器なども動員される場合があり得たかなと、これは推測でありますけれども、想像されます。

こういった律令軍団制や烽の制度というのは、八世紀後半に東アジアの情勢が安定するということもありますし、国内的に民衆の階層分解が進んで、軍団を維持するというのが三人に付き一人という、民戸から一人ずつ徴兵するという制度が実効的でなくなってしまったということで、相次いで停廃されます。ただし、七九二年に軍団制が廃止されても、陸奥・出羽・佐渡と大宰府管内諸国は除かれております。それから、烽も七九九年に停廃される、止められるんですが、大宰府管内は元のまま設置せよということが書かれております。やはり大宰府管内というのは、軍団制あるいは烽の制度の中でも、軍事的な制度の中でも、特に気を遣われており、八世紀の最末期にでも気を遣われ、九世紀にもその体制が延長上で延びていくということがあろうか思います。

三　鞠智城の立地の歴史的意義

そうした九州の中における鞠智城の立地ということでもあるんですが、その鞠智城の立地の背景としましては、これまで笹山先生、岡田先生、あるいは大田先生のお話しにもありましたけれども、有明海と国際関係が係わっていると考えられます、遡ると筑紫国造の磐井の戦いというのが六世紀の初めにありますけれども、これは、高句麗や百済や新羅や伽耶の外交使節が、それまでは畿内の大王の所に行っていたのが、筑紫君磐井の所に来るように、遮ってしまったことに端を発しました。まあ、

この外交権を奪われるということは、最先端の文明知識、技術、そういったものを自分が入手して、他の地方豪族に分けてやるという体制が大王から磐井の方に移行してしまうということになりますから、これは大変な、大和の倭の王権にとっては大変な事態になったということであります。この磐井の本拠地が、八女古墳群の岩戸山古墳が磐井の墓だということになりますけれども、筑後国であります。肥後国にとっては、すぐお隣、すぐ北側の地です。この磐井の考古学的あるいは文化的なテリトリーは、『日本書紀』にも筑紫国と肥国と豊国を勢力範囲として、行動を起こしたことが書いてありますように、ちょうど六世紀の前半、この石人石馬が分布する筑紫と肥国と豊国であり、石人石馬の文化圏であります。かつ石人石馬の石が阿蘇山の阿蘇凝灰岩というのでしょうか、阿蘇石と言われている石で作られる、見事に磐井の戦いの後、石人石馬の文化が無くなっちゃうということでありますけれども、そういう文化圏からいくと、筑紫君磐井と肥国の地方豪族との間もかなり密接な関係があったとみていいと思います。その肥国の地方豪族でいうと、江田船山古墳の出土した鉄刀銘に、「獲加多支鹵大王」と肥国の地方豪族との関係が象徴的に銘文として残されているということが、私はいえると思います。そう意味では、肥国の地方豪族もですね、中央政府との動き、あるいは磐井の行動と関係があります。また、磐井の行動の背景には、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅・伽耶との交流というものが背景にあるということですから、東アジアの動きの中で、この肥国の地方豪族たちも大きくその関与していたということが言えるだろうと思います。その象徴がこれまでもお話しに出た、火葦北国造阿利斯登という人が大伴氏、まあ大伴金村の命で、朝鮮半島に出張っていったという伝承であります。その息子の日羅という人は、百済国に存在して、その日羅を対外外交の顧問として倭の大王

が召し出したというような記事が『日本書紀』の中に、敏達天皇の記事に残っています。つまり火葦北国造がやはり半島との関係の中で、外交関係の中で大いに活躍して、その息子は百済の政権の中にも位置付けられているというようなことがあったということであります。私は有明海に面した肥後国の地域というのが有明海、私は大陸・半島とわりと密接に繋がるような交流の中で歴史を刻んできた地域だというふうにみて良いのではないかというふうに思っております。

その肥国の豪族の一部が筑前国の嶋郡の大領、郡司にまでなっているという話しは先ほど申し上げました。また、薩摩国の正税帳をみますと、薩摩国の出水郡だとか薩摩郡の大領も肥君が任命されております。当然倭の政権、あるいは律令国家が薩摩国に伸長していく、勢力を拡大していく過程で肥後国の地方豪族が大きく進出していくということは当然あっておかしくないと思っております。その有明海は、笹山先生のお話しにあったように、九世紀の末でも新羅の海賊が肥後国に、を襲ってきたという記事があるぐらいですから、そういう意味で決して大陸・半島との関係が粗であるというような土地柄では、私はないのではないのかなと思っております。

あと菊池川の有力な生産地を鞠智城の場所というのは、後からまあそれを押さえるような場所ではないのかなと思っております。先ほどの岡田先生のお話しでは、「車路」という歴史地理学で確認される古い時代の古道が大宰府から鞠智城近くに至った後、そこを一つのクロスロードの場所として薩摩に向かう道と、豊後経由で日向に向かって大隅に進んでいく道があったということであります。まあ三叉路でしょうか、その交点に鞠智城が位置するというお話しがあったわけであります。これも私たち、かつては延喜式に書かれている十世紀代の駅路のコースがやっぱり研究の出発点で、古代交

通の出発点であったんですが、それ以前の八世紀とか七世紀の交通路というものを考えると、今の「車路」のような道をやはり優先的に考える必要があるのではないかというふうに思っております。

先ほどの筑後と肥後との密接な関係というのは、八世紀の初めの筑後の国司である筑後守の道君首名という有名な人物がいるんですが、彼は、肥後国守も兼任しているんですね。従って八世紀初めの段階で筑後守が肥後守も兼任して、この人は有能な人で筑後国の陂・池も、この人が造って、その池のお陰で地元の民衆が潤っているという記事が『続日本紀』にも記載されているわけであります。そういう意味で大宰府から筑後経由、筑後・肥後というかたちの道も太いパイプが、私はあったのではないかと思います。

鞠智城の築城、造営、経営体制というものを考えますと、先ほど言ったように、その際には大宰府が修理するということであります。そこで、築城の時の技術を問題にしたいんですけれども、大田先生のスライドの報告でもあったのですが、古代のまず朝鮮式山城であり、百済系の技術をおそらく使っているはずですので、その百済系の技術が版築ですとか、石垣ですとか、水門などに、それがどういうふうに現れているか、ということを考古学的にぜひ伺いたいと思います。また、八角形の建物などは、ソウルのすぐ近郊の河南市にある二聖山城にも八角形だとか、九角形とか、十二角形とか、十三角形もあったと思いますけれども、私も調べにいったことがあるんですが、そういった意味で百済の山城との構造がどういうふうに同じで違うかというようなことも今後さらに極めていただきたいと思います。また掘切門だとか、池ノ尾門などの礎石、門の扉を置いたものすごく大きな花崗岩製の礎石が、軸受けの孔が空いているのがありますが、そういった石の構造、城門の構造などもぜひ城門

構造がよく分かっている大野城や岡山県の鬼ノ城とぜひ比較していただきたいなあというふうに思っております。

まあ、そういう百済系の技術を使ったというのが形の上で見える場合が幾つかあるかなと思います。一つは、百済系の軒丸瓦、文様の軒丸瓦が見つかるとかですね。それから遺物の面では、先ほども写真で見せていただいた、百済系の菩薩立像、小金銅仏が出土しています。それから八角形の建物の二聖山城との共通性、貯水池・貯木場の共通性みたいなものもあります。ただし、二聖山城の場所は古くは百済の故地ですが、二聖山城が最終的に機能しているのは新羅時代だと思うので、百済の技術なのか、新羅の技術なのかというのは、まだもうちょっと検討が必要かなと思います。

八世紀のこの鞠智城の経営につきましては、大宰府が担当する面と肥後国が担当する面と地元である菊池郡がどのように関与したかという面の三つの相がありますが、その他に中央政府との関係ですね、があるんだろうと思っております。

大宰府の場合は、大宰府が直接修理したという記事があり、そしてそういう場合にはおそらく「鞠智城司」のような役所が置かれるんだろうなというふうに思います。また、国司、肥後国が管轄するようになりましたら、国司の下で、例えば軍団との関係でこの笹山先生のお話しにあったように、軍団の兵士がこの城を防備するというような体制になるんだろうと思います。一番最初は、大宰府が関与していれば、防人がここに来ても良いかなと私も考えております。それと同時に、所在郡である菊池郡も当然関係するということがあると思います。ここで出土した「蘇人忍□五斗」と読まれている荷札があるんですけれども、これは、郡名、国名を書いてないで、名前だけ、人名だけ書いてある荷

札であります。おそらくこういうものは一郡内で機能する場合でありまして、関連するものとしては、これは話すと長くなるんですけれども、長野県の屋代遺跡群あるいは島根県の青木遺跡で出土した人名から書き始めた荷札木簡があり、これは郡役所のレベルの範囲、郡の範囲内で機能しているという例であります。まあ場所は書いてないけれども、菊池郡内に秦人忍という人がいて、その段階の荷札が外されているという可能性があるかなというふうに考えております。

国の場合は、この鞠智城の北西に「シャカンドン」と呼ばれている地名があるというので、これが「佐官どん」だとすると、国府の「佐官」ですよね、まあ大宰府の佐官ということもあり得なくはないんですけれども、何かこの城を担当すると、別当として担当することも可能性は考えられなくはないかなと現地に伺った時に思いました。

あと、灰塚という展望のものすごく良い所に行くと、あれが「日の岡」ですというふうに教えていただいたんですけれども、おそらく烽が最後の、鞠智城に接続する最後の烽の位置が、北側の烽の位置がすごくよく分かるのであります。これは、一つ分かってくるとネットワークが芋蔓的に分かってくると思うので、「車路」とは別にですね、ぜひ烽のネットワークも究明していただけるとありがたいと思っております。

この鞠智城は、お話しがあったように、九世紀の半ばにも、菊池城院の兵庫の鼓が自然に鳴ったとかですね、菊池城の不動倉が焼けてしまったとかいう記事があったり、八七五年には烏が菊池郡の倉庫の草葺きの草を抜いてしまったという記事があったり、八七九年には肥後国菊池城院の兵庫の鼓が鳴ったり、とかいう記事があります。九世紀だとおそらく肥後国菊池城院と書いてあるので、この

時代は大宰府の鞠智城というよりは、肥後国の鞠智城だと思います。その中では稲穀の倉ですよね、米倉と兵倉、それが存在する場所として、九世紀代には大きく機能していただろうと思います。

おわりに

で、古代の朝鮮式山城もですね、あの城郭だけではなくて、必ず大野城でも基肄城でも米倉があります。それはそこに籠もって防衛戦を戦うための倉庫群が必要です。それから、兵倉も必要ですよね。そういった機能の、特に兵倉、米倉としての機能としてはですね、大宰府から出土した、発掘調査で出土した木簡に「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随　大監正六位上田中朝」（筑前筑後肥等国に基肄城の稲穀を分かつために、大宰府の役人である大監の正六位上田中の朝臣という人が派遣されている）という、これは天平期、八世紀の半ばの木簡だとされておりますけれども、そのことを窺わせてくれます。八世紀半ばに鞠智城と同じように朝鮮式山城の中に米倉があって、そこに米がたくさん蓄積されていた基肄城は、大宰府の管轄下にあって、そこにある米倉にある米を筑前・筑後や肥等の国ですから、肥前・肥後が入ると思うんですけれども、肥前・肥後に配るために基肄城に大宰府の役人が派遣されています。八世紀の半ばの段階で基肄城の管轄というのはやはり大宰府であって、そこにある米も大宰府が利用する権限を持っていたということを示しているようです。基肄城は一部肥前ですね、筑前と肥前に跨る山城でありますけれども、私は、八世紀代の鞠智城を考える時には、もう少し大宰府との関係、肥後国司との関係を重層的に検討する必要があるのではないかと思っております。

ということで、あの東アジアとの関係、あるいは日本の古代の律令国家の形成過程の中で、鞠智城というものをもういっぺん歴史的に位置付けていくということがなおまだ課題が少しあるのではないかというふうにも思っております。一方で、百済や朝鮮半島の古代山城との比較研究とかですね、あるいはこれまでの発掘調査成果、すごい成果が私、今日も伺って、上がっていると思うんですが、それがあまりに研究の世界で知られていないということがあります。そういった発掘調査成果の、何といいましょうか、報告、発信というものをお願いしたいなあと思っております。

以上ちょっと時間が私もオーバーしてしまいましたけれども、短時間で駆け足になっていまいましたが、後で機会があれば補いたいと思います。どうもありがとうございました。